

## お釈迦様ってどんな人（上）

2000年10月28日 岡本 英夫 先生

今回はですね、「お釈迦さまってどんな人」という題名にさせていただきました。こういう問いただったらすぐに返事ができるような感じもしますが、しかし逆に漠然としていて、なかなか難しい面もあるわけですね。

普通、Aさんってどんな人と言ったら、それは親切で、やさしくて、配慮があってと三つぐらい言ったら、ああそんな人ならお見合いしてみようというような感じで話がすぐ進んだりしますね。そういうような答え方もあるし、Bさんはどんな人と言ったら、それは昭和二十二年に福岡県で生まれてと、履歴を言うような答え方もあるわけですね。

それでお釈迦様ってどんな人と言ったら、これについても色々な答え方が実はあって、普通でしたらいつどこで生まれたかを言うわけです。しかしそれがはっきりせず、説によって百年ぐらい違いがありますね。だいたい紀元前五世紀から紀元前四世紀頃の人ですね。その当時、インドにはたくさんの国があって、お釈迦様はその一つの国の王子様として生まれ、ひとり息子であった・・・そのように史実にもとづいた描写というようなものが答えになるというのが普通かもしれません。

そのような捉え方というか、研究ももちろん盛んになされていると思いますが、今、見てみようと思うのは、お釈迦様というお方は、その誕生から、実は誕生以前から、亡くなってゆかれるまでの生涯の全てが、私達にとって大変大切な教えとなっているんだと言う受け止め方があります。

お釈迦様の教えということのをさっきの史実にもとづいて言えば、だいたい三十五才頃悟りを開かれ、八十才で亡くなってゆかれるまでの四十五年間、いろんな教えを説かれたということですね。ですから、三十五才以降のお釈迦様から、私達は経典などを通して教えを聞くということになります。それは実際に、お釈迦様が説かれた教えそのものを聞いてゆくわけです。

しかしもう一つの見方は、お釈迦様の誕生そのものが私達にとって教えとなるという事なんですね。普通は、そういう事はまずないと思います。私達でも、誕生して小学校へ行って、大学へ行って、教員の免許を取って学校に赴任して、そこから教えるわけです。教えるというのはそこから始まるわけですね。ただお釈迦様の場合は、もう誕生した時にはお釈迦様はこうであったんだ、その次ぎはこうであったんだと、その事がもう大切な教えになっている、そういうふうにご生涯のいろんな場面をそのまま教えとして受け止める見方があります。それが八相成道はっそうじょうどうという説き方ですね。八相はっさうというのは八つの相すがたという意味で、お釈迦様のご生涯を八つに分けて、その生涯のいろんな場面が教えとなっているのだという事です。

この八相成道の教えは、仏教の中では比較的有名な教えと言いますか、よく知られているお話です。それを今回は見てゆこうと思っているんですが、今日はまあ半分ぐらいで終わりそうな感じですね。

その前に一つ申しておきたい事は、お釈迦様のご生涯のこの教えが、ただ単独にお釈迦様はこういうご生涯を送られましたと、いわゆるお釈迦様だけの生涯が述べられているのではなくて、もし人が本当の仏教の教えに出会うことができれば、皆このような生涯を送りますという形で述べられているということなんですね。そこが大変大事なところですよ。

ですからお互い、私達の生涯も最後になって、八つの相で書いてみると、お釈迦様と同じだったというようになるという事なんですね。具体的な事はもちろん違うんですけど、その主旨は結局同じようになるというんです。もし八相成道がお釈迦様だけの個人的なものであれば、お釈迦様はそうだったんでしょけれど、私は私で又違うんですという事になります。とても御釈迦様のようにはなれませんかということになってしまいます。するとそのご生涯に触れてみて、なるほど素晴らしいご生涯だなと思ってはみても、直接私と関係がないとなれば、いわゆる教えになってこないんですね。参考意見ぐらいで終わってしまうわけです。

そうではなくて、もし人が本当に仏教の教えというものに出会って、その道を一生歩んでゆくならば、皆必ずこういうような生涯を送るんですと、そういう位置づけで述べられているわけです。ですからこれは言ってみれば、私達が本当

に道を求めて歩いてゆく公式のようなものとして説かれているのです。私自身は応用問題として生きているんですね。ですから応用問題を解くために八相成道の教えが大変大事な教えになってくるわけです。

八相のうち、初めのほうは次のようになっています。

(1) 処天相

「兜率天とそつてんに処じょし、正法しょうぼうを弘宣くせんし」という文章です。お釈迦様は生まれる前に兜率天におられました。

(2) 入胎相にゅうたい

「彼の天宮を捨てて神を母胎に降す」お母さんのお腹の中に入られたのです。

(3) 出胎相しゅったい

「右脇より生じて現じて七歩を行す……声を挙げて自ら称す。『我まさに世において無上尊となるべし』と。」これが誕生の姿ですね。

人の生涯は、普通は誕生から表わしますね。ただお釈迦様のご生涯はその前があるということが大変面白いし、お釈迦様の生涯をとおして、私達の生涯を考える大きな視点がここにあるようです。

今回はこのあたりまで見ておこうかと思えます。ここのところにどのような教えが説かれているかということです。

第一の処天相は「兜率天に処して正法を弘宣し」という文章で表されます。不思議な文章です。まず、お釈迦様は兜率天というところで天人に対して正法を説いておられたということです。欲界の天人に対してです。楽しみに満ち溢れた天人は、その楽しみの楽しみたる所以が真実ではありませんから必ず空しくなる。これは私たちを表しているのでしょう。そのような者に正法（仏法）を説かれるのがお釈迦様です。

第二の入胎相は、その「天宮を捨て」とありますから、次のような意味合いもあるでしょう。つまり、彼の天宮を捨てるということは、楽ばかりを求めていく生き方、楽になることができるのだという考えに立った生き方、楽に執着する生

き方、このような生き方の間違いを知らされて、人間の本当の姿に立ち返って生きるということです。

私たちの生き方に良きにしろ悪しきにしろ大きく立ちはだかっている問題は「楽」ということではないかと思えます。楽になりたい。楽になるための歩みが結局人生の真の姿を見させないのでしょうか。楽を求める歩みはまた自分の上の苦しみを認めようとはしません。なぜ自分がこのような目に遭わなければならないのか、私たちは何度そう思ってきたか分からないでしょう。

そのような人生に対する怨みのもっとも根本的な思いが親に対するものでしょう。なぜこんな自分を生んだのかと親を容易に赦すことができません。もっといいように生んでくれれば自分はこのような苦しみは受けないのにと親を呪います。その限り、この地上でもっとも離れたいのが親です。顔も見たくない口もききたくない、ということになります。もっとひどい対応をすることにもなるかもしれません。

釈尊は、私はその親のおなかの中へは自分の意志で入ったのだ、と言われるのです。（「神を母胎に降す」）自分の親を自分で選んだのだということです。生まれてやがて思春期にでもなれば、いろいろなことに自己嫌悪を感じ、その責任を親にもっていきます。この親から自分は生まれた、そう思うともうやりきれない。もっと他の自分になりたいと思っても、自分が出てきた源がすでに決まっている。この親なのだ。この親をもう代えるわけには行かない。即ち自分という人間がきわめて限定された存在に思えてくるわけです。その限定をしているのがまさに親です。ですから親に対する反発は大変なものがあるわけです。

親からの限定、その呪縛を断ち切って自由になりたい、自分の思い描くような自分になりたい。その思いがまた「天人」の思いでしょう。自分の現実を受け止めず、あのようにになりたいこのようになりたいといって苦を避け夢ばかりを追う。親が決まっているばかりに自分が限定されるしかない、そのように思うしかなくなってくるのです。しかしお釈迦様は自らの意志でその極めて限定されたたった一人のその親のおなかに入られるのです。

ここに怨みを超えた人間の生き方があります。苦を避け楽を求めて生きる生き方を捨て、自らの意志でこの親のおなかの中に身を投じた。ここに人間の問題の解決があります。いやむしろ、誕生以前のこの二つの相は、人間の問題とは何か、それを明らかにしているのかもしれませんが。すなわち、苦を避けて楽に走って終わる人生。親を怨み自分を受け取れないままに終わる人生。この二つの問題です。

この解決は天からこの人間界に降りて仏法を聞き、人間の発する楽ではなく如来の与える真の楽を頂き、自己という存在を、それがどのようなものであろうとも受け入れ、まさに自己自身を自己になりきって生きていくところにあるのでしょう。お釈迦様は誕生前にこの人生の根本問題を指摘されました。これからその生涯においてその問題を問い問題を解いていく歩みが始まるのです。

この初めの二つの相はおもしろいですね。一寸唐突ですけども、映画で言いましたら、最初、タイトルや、キャストの名前とかが出る前にしばらくの間、何かを象徴するような場面が出るでしょう。一幕。あれだなあとと思います。それを最初にパッと見て、あれは何なんだろうかと思っているうちにだんだんと映画が進むにつれて、謎が解けてゆくようなね、要するに、テーマというか、そういうものを最初パッと出すというそんな感じかなと私は、映画的に思っているんですけども。ちょっと映画の見すぎかもしれませんが。

ですからお釈迦様の誕生以前は、こういうような事であったんだと言うわけで、直接的に自分はそれならどうかと考えてみればね、苦を避けて楽を求める、この事が何か自分の人生の一番基本線になってないだろうか。

ある方がですね、その人の先生から言われたと言うんです。何か右すべきか左すべきか分岐点に来たら辛い方をやれと。彼はそれをそのまま聞いてね、自分はいつも辛いい方をやっているんだと言う人がいます。だからなかなか厳しいですよ彼は。自分でもそういう道歩んでいますからね。やさしいんだけど、やはり厳しい一面があります。そのあたりのところを考えれば色々あるんですけども、仏教が目指す人間像というか、仏教というのはどういう人を生み出したいのかですね。又、逆にその仏教の教えによって、人はどういうふうに変わってゆくのですね。人をどのように変えてゆく力が仏教の教えにあるのかですね。それを一口で言いましたら、菩薩と言うんですね。

自利と利他という言葉がありますね。自というのは自分です。自分自身の利というのは、解りやすく考えてみれば自分自身の歩みですね。自分の歩み。自分自身、いよいよ充実してゆこうという歩みですね。これが自利の歩みです。これだけではなくてもう一つ利他がある。この他は他の人。返り点をうつと他を利すと言うんですね。自利は自分自身が歩いてゆく。利他は他を利すと言うんですから、他の人を歩ませるんですね。だから自分個人だけの道では決してないんだと。自分自身が歩いて行けば行くほど、それに応じて人に対しても、あなたも一緒に歩みませんかと声をかけてゆくんですね。そういう働きをするんです。一寸表現は露骨だけど、他を歩ませる、他に働きかけてゆくというわけですよ。そういう自利と利他の両方をやってゆくのが菩薩ですね。

でも人は、初めはどんな場合でも、自分自身の歩みから始まるわけですよ。それがだんだん出来てくることによって、他の人に対するいろんな働きかけ、そういう力が生まれてくるわけです。そうしますとね、この菩薩の目標というものは、かって最初は自分の歩みに比重があったんだけど、比重はだんだんと利他に移ってくるんですね。自分は他の人に働きかけてゆく、これをしよう、これが自分の仕事なんだと。

しかしその為には、自分自身がよりしっかりと歩いていなければ始まりませんから、その利他をするために自利をさらにやってゆくと、こういうふうに比重が利他の方にかかってくるようになるんですね。それで、菩薩と言われる典型的な姿はですね、自分の事に終始するのではなく他の人のために力を尽くそうというのが典型的な姿です。

十九世紀のスイスに、ペスタロッツという教育者がおりました。彼が亡くなった時の碑文には彼の生涯が簡単に書かれていて、その最後にですね、「全てを人の為にし、己の為に何もせず」とこう書いてあるんですね。そんな人はいないだろうと、普通は思うんですけども、伝記を読んだら本当にこの言葉は彼にピッタリだという感じがします。細かな事は分かりませんがね。彼は熱心なキリスト教徒であったわけなんですけど、自分の財産を全部出して、貧しくて教育費を払えない子を教育するんですね。そういうような事も思い出されますね。

これは典型的な例ですね。自分のこと、それこそ自分の為には何もせず、人の為にと。しかし少し現実的に考えれば、何とかこの真実の道、この道というもの

を少しでも人々に伝えたい。それができるために自分自身が、いよいよ頑張らなくていけないという、そういうところが現実的かもしれませんね。

仏教が目指す菩薩という人間像は、決して自利のところ、自分の歩みだけに留まらないんですね。他の人に働きかけてゆく。ここにやはり苦しみがあるはず。なかなか辛い、しんどいと言う事があるはず。自分の為だけやっているのは、楽かもしれないですね。しかし、その楽の方にひたすら向かうというのではなくて、苦をも厭わず、他の人に働きかけてゆく事をしてゆく。苦から楽へ、地獄、餓鬼に背を向けて、とにかく人生毎日、天の方へ、天の方へと向かって行こうとしている自分の生き方を変えてゆくんです。そういう生き方の浅薄さというものをだんだんと知らされていって、本当の道を歩んでゆこうというふうになっていくわけですね。そういう道を歩む時に、私達は極めてこの具体的というか、限定されたこの私、世界に二人としないこの私、誰かと変わってもらいたいと何度思ったかもしれない私、あの人はいいなあと思ったかもしれない私、しかしもう変える事ができないこの私として生涯生き抜いてゆくんだと。そうやって初めて人間としての本来の道を歩んでゆけるんだと。だからいつまでも誰かに変わってもらいたい、羨ましいとかね、あるいは逆に自分は誰かの被害者なんだ、親の被害者なんだという思いではなくてね、この私は自分が選んだこの私です。そういうところに立って歩いてゆく。そこに初めて菩薩となってゆく道が具体的に展開されてゆくんですね。そういうのが本当に人生だと言う、そういうことが最初に課題として出されてゆくわけですね。（休憩）

最初でちょっと時間をとりましたが、二番目の誕生のところを見てみたいと思います。誕生のところはですね、こういう言葉になっています。「右脇より生じて現じて七歩を行ず。光明<sup>けんりやう</sup>顕耀にして普く十方無量の仏土を照らしたもう 六種に震動す」

もうちょっとあるんですが、これは前半ですね。これがお釈迦様の誕生の時のお姿なんですね。右の脇から生まれたと言うんです。インドにはご承知のようにカースト制度いう大変厳しい身分差別の構造があって、一番上の階級がバラモンですね。司祭者。この人達は首から生まれると言われます。それから、二番目のクシャトリアですね。これは、王侯、士族という人達で、この人達が脇から生ま

れると。それから三番目がバイシャ、農民とか庶民ですね。この人達は腰から生まれる。一番下がスードラという奴隷ですよ。この人達は足から生まれると。こういうふうに言われるんですよ。

そのうちインドへ行こうということになっているんですけど、私、以前行った時にびっくりしましたね。もう公衆の面前で一つでも階層が違ったら、もう足で蹴飛ばすんですよ。平気です。それが当然のごとくですよ。凄いですね。あれは、びっくりしました。

お釈迦様は王侯、王子様、クシャトリアという階級ですから脇から生まれる。それも右脇、左脇とあって、右が清浄、左が不浄です。それで詳しく言えば清浄な右脇から生まれたと。こういうふうに言われます。これはお釈迦様の誕生の時の姿なんですけれども、やがてお釈迦様は、王子であるということ捨てて出家をされますね。全部自分の持っている財も名誉も全部捨てるわけです。そういう事を既に誕生の時に暗示して右脇より生ずる。いわゆる王侯士族としての恵まれたもの、名利心の満足など、そういうものを捨てて生まれてきたんだという意味合いがあるようですよ。

次に「右脇より生じて現じて七歩を行ず」とあります。七歩歩くんですよ。誕生直後に七歩歩くんですよから大変な能力なんですよ。これは六道と関係がありまして、七歩ですから六道を超えるわけですよ。六道というものは苦を避けて、楽を求めてゆく歩みです。その歩みというのは、本当の意味で楽になるかと言ったらそういう事はないのです。この天人のところに危機が待っていて、天人五衰とこう言うんですよ。天人になるとまさに楽そのもので、幸せ一杯で後はずっと送れるかということそういう事はないんだと。必ず五つの衰え、これも大きな五つの衰えと、小さな五つの衰えが言われるんですけど、そういうものが襲ってくる。開いた花がだんだんと時間が経つうちに萎れて枯れてゆくように天人もそうなってゆくんと言う事があるわけですよ。

さっきの兜率天に処して、それから遂に天を自ら捨てるということがありましたけれども、ある經典にこういうお話があります。五衰に本当になってしまったら次ぎは地獄に落ちるんですよ。危ないので、天人五衰になりかかった天人にですよ、他の天人達が、あなたは人間世界に帰りなさいと言うんですよ。何故かと言ったら、人間世界だけ仏教の教えを聞くことができるんだから、そこへ帰り



なさいと、そして人間となって生きてゆきなさいと言うわけですね。そういう事がある、その天人は人間世界へ帰ってゆくという話があります。

それと一緒に考えましたらね、さっきの初めは天に処していたが、しかしそこには本当の幸せというものがないと言う事を知って、他の天人達の勧めによって人間となって、具体的な一人の人間となって遂に教えを聞いて本当の幸せというものを成就するという事になってくるんですね。そういうような実際に楽、幸せ、こういうものを目指してゆくんだけれども、こうなるはずはないわけなんですよね。ですからこれは私達の思いのところにだけあるわけで、幸せになったように見えても、又そこで沈んでゆく。沈んでいってまた、幸せを求めてゆく。生涯これを繰り返すだけというのであれば、大変空しい生涯になってしまう。こういうようなあり方、常に幸せを求めて、なれると思う、なれるはずだと思って歩んでゆく。こういうのがいわゆる理想主義と言われるわけですね。それが達成できる根拠はないんです。その根拠のところを、はっきりと培ってゆけばいいんだけど、それをせずには思いだけでやってゆこうと言うんですね。

お釈迦様は誕生されて七歩歩まれたと言う事は、その人間の持って生まれた考え方のような理想主義を超えるんだと。自分は生涯をかけて、その六道の歩みというものをを超えるんだと。そういう理想主義を超えて、本当の自分に立ち返って真実の道を歩んでゆくんだと。こういう事を誕生直後に宣言なさった。誕生直後に宣言したと言う事が一生涯、自分の生涯は、そういう生涯として今から歩み始めてゆくんだと言う事なんですよね。そういう人生を自分は生きるんだという事を明らかにした時に、こういうような状況が起こってきたんです。「光明顕耀して普く十方無量の仏土を照らしたまう」大地、自然界ですね「六種に震動す」と。

光り輝いてあらゆる世界、仏土を照らし、大地が六種に震動した。六種というのは震動の仕方ですね。大地が様々に震動したと。こういう自然界の状況の大変な姿なんですよね。これが何を現わしているかと言ったら、お釈迦様がこのように自分の人生は、人間の思いで歩む理想主義を超えてね、本当の生き方をしてゆく、自分はそういう人生を歩むんだと、そのように人生を明らかにした時に大自然が、宇宙全体というか、全てが感動したんです。そのとおりだと言うかね、よくぞ言ってくれたというか、それこそ本当の道だというかね、大自然が感動した。大千應感動というのがありますよね。これは、大千まさに感動すべし。大千とい

うのは、三千大千世界というか、宇宙というか全世界がね、まさにそれに触れて感動した。そのとおりだと言った。

ただこれは、お釈迦様の誕生直後ですから、今から歩み始める、自分は人生をこういうふうに歩いてゆくとおっしゃったその段階です。先の方に行きましたら実際そのように歩いて行かれるんですよ。それがもう生涯の歩みですよ。人間的な思いを超えて遂に真実の道を歩む。それを今、七歩、いわゆる六歩を超えるんで、七歩と言っているんです。それを遂に生涯をかけて歩いてゆく。生涯をかけて歩いてゆけた時に、今度は実際にそういう事ができた時に又、同じ表現が出るんですよ。これは本当に大千世界がね、お釈迦様によくぞやっさと、人間としての本当の道をよくぞ成就したと言って世界が讃えるんですよ。そういう場面がもう一回出ます。これはだから、予言というか予告ですね。

ここはもう少し続きがあるんです。「声を挙げて自ら称す。吾まさに世において無上尊となるべし」このところも有名なところだと思うんですが、普通はですね「天上天下唯我独尊」という言葉で言われますよね。こちらの方が有名だと思います。「吾まさに世において無上尊となるべし」これは少しやわらかい表現ですね。「天上天下」は全世界において、「唯我独尊」は唯我れ独りにして尊しですね。この独りにして尊しのところが大事なところだと思いますが、これはもちろん自分独りだけが尊いという意味ではないですよ。そうでなくて、この独は独立の意味ですよ。独立者。人は初めはいろんなものに引きずり回されている、六道というものに引きずり回されているわけなんです。遂にそういういろんなものから独立をする。本当の主体性というものを回復する。私達を独立せしめないものが本当に山程ある。

この後の方の何番目でしたかね、降魔相、魔というのが出るというのがありません。魔と一口に言ってもこれも色々言われるんですが、一つは、煩惱と言うのが魔ですね。押さえ方は色々あるんですが、煩惱というものが魔という働きをするわけですね。私達の歩みを妨げてゆくわけですね。煩惱も魔も同じものなんですよ。一寸押さ

える視点が違うんですね。煩惱はいわゆる貪欲とか瞋恚で、私達を煩わせ悩ますわけですよ。こちらの方は魔ですから、魔というのは騙すんです。自分自身の

いろんな心で結局自分が人生を間違えてしまうんです。自分で自分が騙されてしまうんです。そういう一面を強調して魔と言うわけですね。そういうものに騙されている限り、独立者というか本当の自分という主体性を確立することができない。

魔については、そこのところへいった時に見ようと思いますが、少し幾つかあげましたらね、例えば怖畏というようなものがあります。恐れですね。何か、新しい事をしようという時は、やっぱり恐いですよね。これまでと同じような事であれば大体、要領が解っているからいいんだけど、新しい世界に出ようと思ったら何か空恐ろしいというかですね、そういうような事があったりしますね。それから名利というのも、もちろんあります。これが自分を狂わせるんですね。疑いというのもあります。こういうものがいろいろ言われるんですね。

だから、そういうものが私自身の中にあるというか、そういうのが私自身であって、その私がそのものを持ったそのまま、もしたた楽を求め幸せを求めて歩いてゆくと、六歩しか歩めないんだと。その六歩も真実の六歩ではない。又、天に行ったら、そこで天人五衰で衰えて又地獄に帰ってくるんだと言うんですね。だから、その六歩は行ったり来たりするわけで六道輪廻、グルグル回ると言うんですね。突破口がないんです。それを出てゆくのがこの七歩なんだと。

自分を狂わせている煩惱の働き、魔の働き、そういうものを結局真実の光りによって照らされてゆく。これが教えを聞いて歩いてゆくと言うことですね。そういう歩みをお釈迦様は生涯歩いていて、遂に本当の独立者になってゆこう。本当の主体性というものを回復してゆこう。そういう人間となっていこうというわけですね。「天上天下唯我独尊」唯我独りにして、独立者となってそれゆえに尊し。だから、自分もそうであり、あなたもあなたはあなたで独立者となって、それで尊し。「天上天下唯我独尊」と「七歩を行ず」を一つにして、お釈迦様は生まれてすぐ七歩歩いて「天上天下唯我独尊」と言ったと。その事に対して、大自然が本当にそのとおりだ、よく言ったとって感動する。大自然がそのとおりだと言って証明する。讃える。これこそ人間の本当の生きる道だということになるわけですね。それがお釈迦様の誕生の姿だと言われます。

時間が参りましたのでこのくらいにして、第四相以降は次の会で読んで行くことにします。（続く）